

山姥の話

楠山正雄

青空文庫

やまうば
山姥と馬子

一

ふゆ さむ 冬の寒い日でした。馬子の馬吉が、町から大根をたくさん馬につけて、三里先の自分の村まで帰って行きました。

まち 町を出たのはまだ明るい昼中でしたが、日のみじかい冬の事です。村へ入るまでには山を一つ越さなければなりません。ちょうどその山にかかった時に日が落ちて、夕方の方のつめたい風がざわざわ吹いてきました。馬吉は何だかぞくぞくして行きましたが、しかたがないので、心の中に観音さまを祈りながら、一生懸命馬を追って行きますと、ちょうど山の途中まで来た時、うしろから、

うまきち 馬吉、馬吉。

だ 出しぬけに呼ぶ者がありました。

その声を聞くと、馬吉は、襟元から水をかけられたようにぞつとしました。何でもこの山には山姥が住んでいるという言い伝えが、昔からだれ伝えるとなく伝わっていました。馬吉もさつきからふいと、何だかこんな日に山姥が出るのではないか、と思っていたやさきでしたから、もう呼ばれて振り返る勇氣はありません。何でも返事をしないに限ると思つて、だまつてすたすた、馬を引いて行きました。ところがどういものだから、気ばかりあせつて、馬も自分も思うように進みません。五六間行くと、またうしろから、

「馬吉、馬吉。」

と呼ぶ声が聞こえました。しかもせんよりはずつと声が近くなりました。

馬吉は思わず耳をおさえて、目をつぶつて、だまつて一足三足行きかけますと、こんどは耳のはたで、

「馬吉、馬吉。」

と呼ばれました。その声があんまり大きかったので、馬吉ははつとして、思わず、

「はい。」

といいながら、ひよいとうしろを振り向くと驚きました、もう一間とへだたっていないうしろに、ねずみ色のぼろぼろの着物を着て、やせっこけて、いやな顔をしたおばあさん

が、すつとそこに立つて（た）いるのです。そして馬吉（うまきち）の顔（かお）を見ると、にたにたと笑（わら）って、やせたい（うまきち）やらしい手（て）で、「おいで、おいで。」を（し）ました。

馬吉（うまきち）は、

「あッ。」

といった（た）なり、そこに立（た）ちすくんで（し）まいました。するとおばあ（あ）さんはずんずんそばへ寄（よ）つて来（き）て、

「馬吉（うまきち）、馬吉（うまきち）。大根（だいこん）を（お）くれ。」

と（い）いました。馬吉（うまきち）が（だ）まつて大根（だいこん）を一本（ぽんぬ）抜（わ）いて渡（わた）しますと、おばあ（あ）さんは耳（みみ）まで裂（さ）けて（い）るかと思（おも）うよう（な）大（お）きな、真（ま）つ赤（か）な口（くち）を（あ）いて、大根（だいこん）を（も）り（も）り食（た）べはじめ（し）ました。も（り）も（り）か（む）たん（び）に、赤（あか）い髪（かみ）の毛（け）が、一本（ぽん）一本（ぽん）逆（さか）立（た）ちを（し）ま（し）た。

い（う）ま（で）も（な）く、そ（れ）は山姥（やまうば）で（し）た。

山姥（やまうば）は（み）る（み）る一本（ぽん）大根（だいこん）を（た）食（た）べて（し）ま（つ）て、ま（た）「もう一本（ぽん）。」と手（た）を（だ）し（ま）し（た）。そ（れ）か（ら）二（に）本（ぽん）、三（さん）本（ぽん）、四（よ）本（ぽん）と、も（ら）つ（て）は食（た）べ、も（ら）つ（て）は食（た）べ、と（う）と（う）馬（うま）の背（せ）中（なか）に（の）せ（た）百（ひゃく）本（ぽん）あ（ま）り（の）大（だい）根（こん）を、残（のこ）ら（ず）食（た）べ（て）し（ま）うと、も（う）と（つ）ぶ（り）日（ひ）が暮（く）れ（て）し（ま）い（ま）し（た）。

ありつたけの大根を残らずやつてしまったので、馬吉はあとをも見ずに、馬の口をぐいぐい引っぱって、駆け出して行こうとしました。一生懸命駆け出して、やつと一町も逃げたと思うころ、山姥は大根を残らず食べてしまつて、またどんどん追つかけて来ました。間もなく追いつくと、こんどは、

「馬の足を一本。」

といいました。もう馬吉は生きている空はありません。しかたがないので、これもぶるぶるふるえている馬を山姥にあずけたまま、から身になつて、どんどん、どんどん、駆け出しました。するとどうしたものか、気がせくのと、道が暗いので、よけいあわてて、どこかで道を間違えたものとみえて、いくら駆けても駆けても、里の方へは降りられませんが、行けば行くほど山が深くなつて、もうどこをどう歩いているのか、まるで知らない山の中の道を、心細くたどつて行くばかりでした。

とうとう山がつきて谷のような所へ出ました。ひよいと見ると、そこに一軒うちらしいものの形が、夜目にもぼんやり見えました。何でもいい、とにかく入つて、わけを話して、今夜はたのんで泊めてもらおうと思つて、うちの前まで来るとすぐ、とんとん、戸をたたきました。でも中はしんと静まりかえつて、明り一つも来てきません。ぐずぐずしている

うちに、山姥が追っかけて来て、見つけれれば大へんだと思つて、馬吉はかまわず戸をあけて、中へ入りました。

入つてみると、中は戸障子もろくろくなくない、右を向いても、左を向いても、くもの巢だらけの、ひどいあばら家でした。

「なるほど、これではいくらたたいても返事をしないはずだ。人の住んでいないうちのなのだ。それでもしかたがない。今夜はそつとここにかくれて、夜の明けるのを待つことにしよう。」

と、独り言をいいながら、馬吉はそつと上がつていきますと、そこはそれでも二階家で、上は物置のようになっていました。

「同じかくれるにしても、二階の方が用心がいい。」と思つて、馬吉は二階に上がつて、そつとすすだらけな畳の上にごろりと横になりました。横になつて、どうかして眠ろうとしましたが、何だか目がさえて眠られません、始終外の物音ばかりに気を取られて、胸をどきどきさせていました。

するとその晩夜中過ぎになつて、しつかりしめておいたはずのおもての戸がひとりですうつとあいて、だれかが入つて来た様子です。

「はてな。」と思つて、馬吉がこわごわはい出して、二階からそつとのぞいてみますと、折からさし込む月の光で、さっきの山姥が、台所のお釜の前に座つて、独り言をいっているのが見えました。

「今日は久し振りでごちそうだったなあ。大根もうまかつた。馬もうまかつた。あれでうっかりしていて、馬吉に逃げられなければ、なおよかつたのだけれど、残念なことをした。」

馬吉はそれを聞くと、ぶるぶるふるふるえ上がつて、頭をおさえてちぢこまつてしまいました。

しばらくすると、山姥は大きな口をあいて、大あくびをして、

「ああ、くたびれた。眠くなつた。今夜はどこに寝ようかな、白の中にしようか。釜の中にしようか。下に寝ようか。二階に寝ようか。そうだ、涼しいから二階に寝よう。」
「いいました。」

馬吉は「もうこんどこそは助からない。」と思ひました。「山姥のやつ、おれが上にいるのを知つて、上がつてきて食べるつもりだろう。ああ、もうどうしようもない。観音さま、観音さま、どうぞお助け下さいまし。」

こう心の中に念じながら、今にも山姥が上がってくるか、上がってくるかと待つていました。

ところが山姥は、すぐにはなかなか上がつてきませんでした。やがてまた大きなあくびをして、

「二階に寝ればねずみがさわぐ。臼の中はくもの巢だらけ。釜の中は温かで、用心がいちばんいい。そうだ、やつぱり釜の中に寝よう。」

と、独り言をいいながら、大きなお釜のふたを取つて、中に入ったかと思つと、やがてぐうぐう、ぐうぐう、高いびきで眠つてしまいました。

二階からこの様子を見ていた馬吉は、そつとはしご段を下りました。そして抜き足差し足お庭へ出て、いちばん大きな石を抱え上げて、「うんすん、うんすん。」いいながら運んで来ました。そして「うんとこしよ。」と、石をお釜の上のせて、上から重しをしてしまいました。お釜の中からはあいかわらず、ぐうぐう、ぐうぐう、高いびきが聞こえ

ました。お釜に重しをしてしまうと、こんどはまた、お庭から枯れ枝をたくさん集めて来て、小さく折っては、お釜の下に入れました。

釜の中で、
びしりびしり枯れ枝を折る音が、寝ている山姥の耳に聞こえたとき、
山姥はお

「雨の降る夜は虫が鳴く。」

ちいちい鳴くのは何虫か。

虫よ鳴け、鳴け、雨が降る。

ぱらぱら、ぱらぱら、雨が降る。」

と歌いました。

山姥がいい心持ちそうに、ぱちぱちいう枯れ枝の音を雨の音だと思つて聞いていますと、その間に馬吉は枯れ枝に火をつけました。お釜のそこがだんだんあつくなつてきて、そのうちじりじり焦げてきたので、さすがの山姥もびっくりして、

「おお、あつい。」

といって飛び上がりました。そしていきなりふたを持ち上げてとび出そうとしますと、上から重しがのしかかっています、身動きができません。山姥はおこつて、お釜の中で、

「きやツ、きやツ。」とさけびながら、狂くるいまわりました。

馬吉うまきちはかまわずどんどん枯かれ枝えだを燃もやしなから、

「馬喰うまぐうばあはどこにいる。

寒さむけりやどんどん焚たいてやる。

あつけりや火ほになれ、骨ほねになれ。」

と歌うたいました。

とうとうお釜かまが上ままで真まつ赤かに焼やけました。その時じぶん分ぶんには、山姥やまうばもとうにからだ中じゆみ火みになつて、やがて骨ほねばかりになつてしまいました。

山姥やまうばと娘むすめ

—

むかしあるところに、お百ひやくしやう姓せいのおとうさんとおかあさんがありました。夫婦ふうふの間あいだには十とおになるかわいらしい女の子おんなこがありました。ある日おとうさんとおかあさんは、野のらへ

お百^{ひやく}姓^{しょう}のしごとをしに行く^{とき}時に、女の子を一人^{ひとり}お留守番^{るすばん}に残^{のこ}して、

「だれが来て^きもけつして戸^とをあけてはならないよ。」

といいつけて、鍵^{かぎ}をかけて出て行きました。

女の子は一人^{ひとり}ぼつちとり残^{のこ}されて、さびしくって心^{こころ}細^{ほそ}くってしかたがありませんから、小さ^{ちい}くなっていろいろにあたっていました。するとお昼^{ひる}ごろになって、外^{そと}の戸^とをとんとん、たたく音^{おと}がしました。

「だあれ。」

と、女の子がいました。

「わたしだよ。すぐにあけておくれ。」

と、おばあさんらしい声^{こえ}が聞こえました。

「でもあけてはいけないんだって、おとうさんとおかあさんがそういつたから。」

と、女の子はいました。

「何^{なん}だつて。よしよし、あけてくれないければ、この戸^とをけ破^{やぶ}つてやる。」

こういつていきなり戸^とに手をかけて、みりみり動^{うご}かしながら、両^{りょう}足^{あし}でどンドン、どンドン、けつけました。女の子はびっくりして、困^{こま}つて、しかたがないものですから、戸^と

をあけてやりました。

戸とをあけると、ぬつと、おそろしい顔かおをした山姥やまうばが入はいつて来て、炉ろばたに足あしをなげ出して、

「おお、寒さむい、寒さむい。」

といました。

「おばあさん、何なにしに来きたの。」

と、女の子はたずねました。

「おなかがすいた。早はやく御飯ごはんの支度したくをしろ。」

と、山姥やまうばはこわい顔かおをしていいつけました。

女の子はぶるぶるふるえながら、台所だいどころへ行いつて、御飯ごはんのいっぱい入はいつたおはちを持つもつて来きました。山姥やまうばはおはちのふたをあけて、手づかみでせつせと御飯ごはんをつめこみながら、たくあんをまるごと、もりもりかじっていました。その間あいだに女の子は、そつとうちから抜ぬけ出だして、逃にげて行いきました。

どんどん逃にげて行いつて、山やまの下したまで来くると、御飯ごはんを食たべてしまった山姥やまうばが、いくらさがしても女の子がいないので、大たいそうおこつて、

「おう、おう。」

といいながら追っかけて来ました。ずいぶん一生懸命駆けたのですけれど、山姥の足に小さな女の子がかなうはずはありませんから、ずんずん追いつかれて、もう一足で山姥に肩をつかまれそうになりました。女の子は夢中で一生懸命逃げますと、山の上からしばを背中にしよつて下りて来るおじいさんに出あいました。

「おじいさん、おじいさん。山姥が追っかけて来るから助けて下さい。」

と、女の子はいいました。おじいさんは、

「よし、よし。」

といって、背中のしばを下ろして、その中に女の子をかくしました。

すると山姥が追っかけて来て、おじいさんに、女の子はどこへ行つたとたずねました。おじいさんがわざと、「あそこに。」といって、向こうに積んであるしばを指さしますと、山姥はいきなりそのしばに抱きつきました。するとそのしばはちようど崖の上に立ってかけてあつたものですから、山姥は自分のからだの重みで、しばを抱えたまま、ころころと谷そこへころげ落ちました。そのひまに女の子はどんどん逃げて行きました。すると山姥はまた谷そこからはい上がって、「おう、おう。」といいながら、あとから追っかけ

て行きました。

女の子がまた一生懸命逃げますと、また一人のおじいさんが、そこでかやを刈っていました。

「おじいさん、おじいさん。山姥が来るから助けて下さい。」

と、女の子がいますと、おじいさんは「よし、よし。」と、刈つてあるかやの中に隠してくれました。

やがて山姥が追っかけて来ますと、おじいさんはわざと向こうの崖の上にあるかやのたばを指さしました。山姥がいきなりかやのたばに武者振りつきますと、はずみですべつて、ころころと谷そここころがりました。その間に女の子は、またどんどん逃げて行きました。

二

そのうちとうとう大きな沼のふちに出ました。やがて山姥も谷そこからはい上がって、また追っかけて来ました。女の子はもうこの先逃げて行くことができなくなって、沼のふ

ちに立つている大きな檜の木の上に登りました。すると山姥が追っついて来て、

「どこへ行つた、どこへ行つた。どこまで逃げたつて逃がすものか。」

といいながら、きよろきよろそこらを見まわしますと、木の上に登っている女の子の姿が、沼の水にうつりました。山姥はいきなりそのうつた姿をめがけて、沼の中に飛び込みました。

女の子はその間に木の上から飛び下りて、沼の岸のくまぎさを分けて、逃げて行きますと、一軒の小屋がありました。中へ入ると、若い女の子が一人、留守番をしていました。女の子はこの女の子の人に、山姥に追われて来たことを話して、石の櫃の中へかくしてもらいました。

すると間もなく、山姥はまた沼から上がつて、どんどん追っかけて来ました。そして小屋の中に入つて来て、

「女の子が逃げて来たろう。早く出せ。」
とどなりました。

「だつてわたしは知らないよ。」

すると山姥は疑い深そうに、鼻をくくんくん鳴らして、

「ふん、ふん、人くさい、人くさい。」

といいました。

「なあに、それはわたしが雀を焼いて食べたからさ。」

「そうか。そんなら少し寝かしておくれ。あんまり駆けてくたびれた。」

「おばあさん、おばあさん。寝るのは石の櫃にしようか、木の櫃にしようか。」

「石の櫃はつめたいから、木の櫃にしようよ。」

こう山姥はいつて、木の櫃の中に入って寝ました。

山姥が櫃の中に入ると、女は外からぴんと錠を下ろしてしまいました。そして石の櫃

の中から女の子を出してやつて、

「山姥を木の櫃の中に入れてしまったから、もう大丈夫だ。」

といつて、太い錐を出して、火の中につつ込んで真つ赤に焼きました。この焼いた錐を

木の櫃の上からさし込みますと、中で山姥が寝ぼけた声で、

「何だ、二十日ねずみか、うるさいぞ。」

といいました。その間に女は櫃に穴をあけて、ぐらぐら煮え立っているお湯を穴からつ

ぎ込みますと、中で、

「あつい、あつい。」

ときけびながら、山姥はどろどろに煮えくずれて、死んでしまいました。女は山姥を殺して、女の子といっしょにうちへ帰りました。この人もとは山姥にさらわれて、こんな所に来ていたのです。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：土屋隆

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山姥の話

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>